平成２０年１２月発行　　№２２

子どもと造形

児造研ニュース

児童造形教育研究会機関紙
編集・発行人　　長　尾　宏　一
事務局　〒111-0051
台東区蔵前３－20－２ クレパスビル内
TEL　03(3862)3937

第 32 回児童造形教育研究集会

「 図工で育てる子どもの力」をみなさんで探った夏の研究会を終えて

児童造形教育研究会　会長　　長尾　宏一

実技「粘土の山にいどもう」

「どこまで、高くできるかな。もっと、もっと！」と、体全体を働かせて活動する子どもの姿。本研究会は、大人の実技研修に子どもも参加しています。参加者のお子さんですが、子どもが一緒に活動すると、雰囲気が変わるだけでなく、子どもの感じることやすることへの理解が深まるのです。

今回は、新学習指導要領の内容を言葉で捉えるだけではなく、子どもが活動する姿から探ってみようという研究会を企画しました。

午前には、図工の時間に子どもたちが表現活動をする姿を追って撮ったビデオを視聴しながら、パネル・ディスカッションを行いました。子どもの手の動きに創造的な技能が発揮されているのを見つけたり、表現の変化にその子の豊かな発想を見つけたりなど、図工の活動を通して子どもが自分の資質・能力を発揮し培っていることを確かめました。図工の時間に子どもたちがコミュニケーションをしながら、様々な力を引き出し合っていることも再確認できました。

お昼前から始めた実技研は、四つコースに分かれ、それぞれ二つの実技を行いました。子どもになったつもりで活動することにより、表現する楽しさや意味を感じとってもらえればと、それぞれに提案を工夫しました。今回より一層重視されている鑑賞活動も体験してもらいました。鑑賞して感じたことを話し合うギャラリートーク、カードにまとめる鑑賞活動、鑑賞→表現→鑑賞の活動方法など、様々な学習の仕方があることに参加者も驚きの様子。とても好評でした。

実技終了後、ざっくばらんに図工について参加者の皆さんと話し合いました。図工という教科が子どもの育ちに欠かせない大切な存在であることを皆さんが感じているのを知ることができたのは、大変嬉しいこでした。一方で、皆さんの周りでは大人の価値観を子どもの表現に求める、いわゆる作品主義が未だに多いという悲しい現実を突きつけられました。

図工を通した子どもの真の確かな育ちを多くの皆さんに伝える努力をしなければと、改めて感じた今回の研究会でした。

参加していただいた皆様に心より感謝するとともに、また来年もお会いできればと願っております。

造形あそびの実技「つくって・みつめて探検隊」

パネル・ディスカッション

「図工で育てる子どもの力」

― 子どもの活動から見る新学習指導要領 ―

パネラー　平田　智久（十文字学園女子大学教授）
石賀　直之（鶴見大学短期大学講師）
林　耕史（筑波大学附属小学校）
進　行　堀井　武彦（武蔵野市立第五小学校）

今回のパネル・ディスカッションでは、次の二つの活動を映像で観ながら、そこで働いている子どもの力について討論を進めていきました。

活動１　黄ボール紙の上に液状粘土を広げ、手で伸ばしたり思いついたことを描いたりしながら，イメージを広げていく絵に表す活動
活動２　電動糸のこぎりを使い、自由にドライブするように板を切っていき、できた形を思いに合わせて組立てていく立体に表す活動

新学習指導要領は、「形」「色」「イメージ」について子どもが働かせる力について、現行の内容をわかりやすく整理する形で編集されています。表現や鑑賞の活動を通して、子どもが感性を働かせながら感じたり、思ったり、考えたりして、自分なりの新しい意味や価値を見出す「生きる力」について、指導者がより具体的に捉えやすいように解説してあります。全体会で紹介された映像は、このことを、子どもが活動する実際の姿と結びつけるものでした。

まず、活動１では、片手で液状粘土を広げていた女の子が、両手を使って丸や波線を描いてみたり、紙に擦りつけるように手を動かしたり、スタンプしたり、そこには体全体の感覚を働かせながら活動する子どもの姿を確認することができました。
また、近くの友だちが活動する姿に触発されて、自分で試してみたりする様子もみられ、映像提供者でもある林先生が大切にされている「言語によらない造形的なコミュニケーション」が行われている様子も確認することができました。

次に、活動２では、映像提供者の北川先生から、この活動の導入について紹介がありました。電動糸のこぎりの台数が限られているので、板を切っていく活動と、最初に板にローラーなどを使って着色する活動と、活動の始まりを子どもたちが選択することを提案したということでした。

題材名やテーマ、材料、用具、技法などから、子どもたちが活動の見通しを立て、手順を自分で選択していくことの中にも、生きる力へつながる感性が働いていると言えるでしょう。また、板を丈夫に安定した組み合わせをするために、部品に切込みをいれていく技法についても、「こうするといいよ」と教え合っている様子などもみられ、知識・技能に関しても教師の情報提供だけではなく、子ども同士の学び合いを通して必要な情報を獲得していく集団づくりの大切さを実感することができました。

パネリストからは、平田先生と石賀先生が幼児教育の立場から、「感じて⇒考えて⇒行動」というサイクルは人間が生きるということの根本に関わる行為だから、幼児教育では、「遊び」や「生活」の中にある造形を出発点として考えているが、小学校の先生はどうしても「教科」の枠の問題として考えるところに違和感がある，という意見も出されました。

「新学習指導要領についてもう少し触れてほしかった」という声も参加者から寄せられましたが、一方で「これでいいんだ！と納得することができた」という声もありました。課題を残しながらも、新学習指導要領本格実施に向け、各指導者が子どもたちの活動を読み解く視点の提案として、示唆に富む全体会となりました。

（文責　堀井武彦）

「夏の研修会・実技研修の報告」

Ａコース＜生活や社会で生きる力＞

「みる，さわる，感じる，を重視した造形遊び」
＋「すきなものでともだちのわ」

大泉　義一

『みる，さわる，感じる，を重視した造形遊び』ではまず，モノプリントに挑戦してみました。画板の上にビニル袋をかぶせ，ツルツルの面をつくります。初めはおそるおそる指先で，やがて大胆に手や腕全体の運動を通して，絵の具を“材料”として扱いながらその形や色，質感を楽しんでいきました。そしてその過程で画用紙をかぶせ，写し取ることで，刻々と変化する自分の感覚を体感することができました。次に「ボーガスペーパー」のロールを床に長くのばして，紙の目に沿って裂いたり，逆らってちぎったりしてその感覚を十分に味わってみました。そしてねじったりつなげたりしていく中で自然に人と人ともつながっていき，最後はそこにいるみんなでつくりあげた意味が残されました。

『すきなものでともだちのわ』では，自分のすきなものを画用紙に気軽に描き，はさみで切り抜いてまわりの人とホチキスでつないでいくことから，新たに自分のすきなものを発想する，という活動を行いました。そこでのつなぎ方は，その人なりの意味であり，思いがけないストーリーが生まれます。そうした意味と意味との“ギャップ”が造形によるコミュニケーションの面白さであり，つながる安心感を生み出しており，それが，「生活や社会に生きる力」の原点であるということを確認しました。

このように本コースでは，低学年の子どもたちは知識や言葉でものや環境と関わるというよりは，自らの五感やイメージを通してそれらと関わり，自分なりの意味を見つけていく，それが生活や社会と関わる力の基礎となるのだ，という考え方の基で実技研修を行いました。

Ｂコース＜子どもに育てたい資質や能力＞

「カッターナイフ　グランプリ」
＋「つくって・みつめて探検隊」

名達英詔

ねかせて、チクッ、ひじでスーッをキーワードにカッターナイフの扱い方や子どもへの指導方法を知り、用具と一体化した「カッターナイフ名人」をめざした「カッターナイフグランプリ」。ひじに「バス」のイラストをはりつけて、ひじでリードするようにカッターを走らせると、色紙からは見る間に美しい形が切り出されて立体作品へと姿を変えていきました。鑑賞に便利な回転台も登場してしばし作品を見合う参加者の皆さん。

学習指導要領でも、用具を使う中から形をみつけたり、感じたことを生かしながら表したいことを表したりするためにも簡単な小刀類（カッターナイフ、ダンボーカッターなど）を使用する用具として明記しています。工作につきものの小刀類。私たちが刃物を恐れず、刃物の使い方を指導することを恐れずにあるためにも有意義な研修となりました。

続いて行われた「つくって・みつめて探検隊」。身近にあるものや場所などと進んでかかわり合い、その特徴を基に発想したり想像力を働かせたりしながらつくる造形遊びです。イスのならべ方を変えるだけで見え方も変わり、意味が生まれるという解説の後、初めて出会った参加者同士でグループを組み、校舎のあちこちへ。お気に入りの場所とモノを使った表現を展開しました。絵の具バッグと推理小説本の構成、倒れた机と立てかけられたほうき、伏せられた本の連なりと屹立する木材、扇風機にあおられるスズランテープの群れ、揺れるカーテンに映る洋服やイスのシルエット、体育用具のカラフルでリズミカルな構成、廊下の壁から突き出るいろいろな形のカラーダンボール…。思い思いの表現は異空間を生みだし、その後の鑑賞活動でも、その細部や全体の意味を見つけ、伝え合う楽しさを実感できました。

Ｃコース＜発達段階に応じた〇〇〇＞

「粘土の山にいどもう」
＋「にじ色の水たまりをつくって」

長尾宏一

Ｃコースは、前半で絵に表す実技を行いました。白のクレヨン・パスで好きな形を画用紙に描き、その形の中をたっぷりの水で濡らした所に、何色かの絵の具を垂らしてにじみませることから始めました。画用紙に水彩絵の具が自然に広がってにじむ美しさは、子どもにとって感動的な体験であり、表現意欲を高めます。単なる絵の具のにじみですが、参加者それぞれに違った色合いやにじみ方が生まれました。

次に、にじみの形や色から発想を広げて、想像したことを絵に表す活動に入りました。形や色からどのようにイメージを広げたらいいのか、皆さんで話し合いをしてから個々に絵を描きました。発想に苦労していましたが、素敵な作品がたくさんできあがりました。

後半は、４・５名のグループをつくり、テーブルに置かれた大きな粘土の塊にみんなでいどみました。まずは、その塊をみんなの知恵と協力で高くすることを競いました。初対面であっても、粘土を高くするという活動を通して自然と会話が生まれ、子どものように笑顔で一緒に係わる姿が印象的でした。高くする方法がグループごとに違い、造形の生み出す創造力を感じることもできました。

高くした粘土をまた塊にして、今度はみんなで穴を掘ってお互いの手と手を塊の中で合わせました。その状態のままで、塊の上に平田先生が「雨が降ってきたよー。」と、お椀一杯の水を掛けたのです。みんなから「わぁー。」という声。ビショビショになった粘土の山から手を出して、ヌルヌルした粘土の感触を楽しみながら発想したことを形にしていきました。

とにかく、みなさんが子どものように楽しんでいたこと、コミュニケーションによる表現が生まれたことに発達段階を越えた造形を感じました。

Ｄコース＜表現と鑑賞そして読解力＞

「私の中の美術館」
＋「ギャラリートークから広がる図工の時間」

依田淳子

「私の中の美術館」では、「みる」（鑑賞）と、「えがく（表現）を一体化した活動を体験しました。まず、「怒り」「喜び」などの感情を、色や形、テクスチャなどの「造形言語」で、はがき大の画用紙に表します。そして、それらのカードを並べ、同じ感情を表したものを当て合うゲームをしました。参会者同士がコミュニケーションを図りながら「造形言語」で語り合うという新しいスタイルの鑑賞に、大いに盛り上がりました。

「ギャラリートークから広がる図工の時間」では、４～５人のグループで、１点の児童作品について、その絵にこめられて子どもの思いや息遣いを感じ取り、司会者のナビゲートによって互いの考えを伝え合う活動を行いました。子どもの思いに寄りそい、思いを読みとって意見を交し合うことで、更に絵の見方がどんどん深まっていくことを実感することができました。子どもの絵をみるとき、「どうやってかいたのか」といった「技法」に目がいってしまいがちですが、その絵をかいた「子どもの思い」をみることが、作品の評価につながるということを再確認することができました。

「対話型鑑賞で読解力を育てる」では、図工における「みる力」と国語における「読解力」をリンクさせ、聞き手に名画のよさをプレゼンテーションの形で伝えるという、国語科での活動の実践が紹介されました。他教科との関連を図って授業を組み立てることにより、図工で培った「みる力」生きて働いてくるということが示唆されました。

子どもコーナー！

中村哲夫

本研究集会が出発してから、すぐこのコーナーを設けました。

毎回多くの方から申し込みがあり、とてもうれしく思っています。

今回、市川市立中山小学校の荒井由子先生と千葉大学教育学部の芦田裕子先生を講師に迎えて実施しました。アルミホイルとビー玉でつくった「まゆ玉」で遊ぶなど充実した活動になりました。参加した子どもからも「楽しかった」という感想をもらいました。

来年も、このコーナーを設定しますので、是非ご利用ください！

「夏の研修会を終えて」　― アンケートに答えて ―

活動が早い子，遅い子，同じ時間内でどのように対応すればよいのでしょうか？

林　耕史

実際に授業をすると，子どもたちの製作の速さの違いに戸惑うことが度々ありますね。研修会などで多く出されるのも、この質問です。

対症療法としては，早い子に材料を再び与えることがあげられます。描く題材などでは，早く終わった子に小さな画用紙などを与え，もう一つ表してみるように促します。他に表したい事がある子には，うれしい配慮です。一方，遅い子がいる場合は，作品が小さくてもよいという設定にするか，画用紙を小さくトリミングするなども一つの方法でしょう。

しかし逆に質問したいのは，「その題材の授業は，何を目標にしているのですか？」という事です。大切なのは，早い（速い）遅いではなく，授業が成立し，主眼が達成できたかどうか，です。

「全員が同じ速度で製作するという力をつける」ことを目標にするのでしたら，技法的なバックアップは必要ですし，材料もそれに見合うように均質，或いは差異をつけるべきでしょう。でも，まさか製作が早い子にハンディを与えるなどということはしませんね。つまり「同じ速さ」を子どもたちに求めるのは，本来おかしな事なのだと思います。

「早く終わった子が席を離れて遊ぶので困る」から，その対応を教えてというご質問も，授業の目標に照らして検証してみてください。ねらいが達成できた子なら，極論すれば問題はないのではないでしょうか。もはや題材が，子どもたちにノルマとして受け止められているとしたら早く終わらせたいでしょうし，片づけ仕事になるでしょう。この事を反省したいと思います。

実はこの質問は，子どもたちに提供した題材および授業に対する，私たち自身の反省材料なのです。

太陽を絵の中に入れたがる子がいます。「だめ，今度はやめておこう」ということもあるのですが，どうしたものでしょう？

安倍啓斎

いつも同じようなパターンで描いている子どもを見ると不安になるのはどの教師にもある経験だと思います。ただ、よく考えてみると「お日様」に限らず、類型的な描画はよくあります。

幼児から低学年によく見られますが、女児が女の子を描けるようになると同じパターンで何度も描き続けたり、男児ではポケモンなどのキャラクターを繰り返し描いたりします。それぞれの子どもがそのような自己内の模倣期を迎えるのは成長の上で必要な過程なのではないでしょうか？そう言う私も低学年の頃、ひたすら、戦艦や戦闘機を描いた記憶があります。ただ、その繰り返しから脱却できるようにその子の成長を見計らってタイミングよく、声かけするのも教師の大切な役割です。私の場合、父から、戦争の悲惨さを強く話され、小学２年生の頃、自由帳から戦争の絵は消えました。（その後、怪獣に走りましたが…）

さて、お日様ですが、私はこのまま同じように累計的な表現を続けるのは不適切と判断したとき、教科書に載っていた作品を子どもに見せました。それは、「外国人が描いた絵」です。その絵は赤道直下に住む児童の絵でした。お日様の色は黄色でした。しかもサングラスをかけており、お日様の絵を見た子どもたちは、その日を境に次第にお日様の描き方を工夫したり、描かなくなったり、しました。

自分なりの独創的な工夫をしていくことが、何よりもステキな自分をつくっていく大切なポイントであることを タイミングを見計らい子どもたちに伝えたいものです。

自由な発想や造形活動を保証し，かつ逸脱しないために必要な図工の時間のルールとは？

北川智久

表題のような質問を寄せていただきました。今回は、この質問に沿って私の考えを述べます。

私が授業を行う際、次のようなことを繰り返し子どもたちに話します。（時には一部を板書あるいは掲示）

・いちいち先生に聞かず、よいと思ったことは自分で決めて実行する。常に発見、工夫、発明を心がけよ。
・友だちのよいところはまねをしてよい。そこから自分の工夫を広げればよい。
・自分や友だちの表現のよいところを見つけよう。

これは前向きなルールです。まね、という部分に誤解を生じそうですが、表現方法の工夫を参考にするという意味で子どもたちには伝えています。子どもの離席はコミュニケーションにつながるものはむしろ奨励しています。

禁止的なルールが必要になることもあります。

・残酷、下品はだめ。
・アニメ、ゲームなどのキャラクターはだめ。
・アドバイスはよいけれど、友だちの表現をけなす言葉はだめ。「なにそれ」「へた」など。
・友だちの作品をよごす、壊すことはだめ。　など

血が噴き出す表現や戦争、怪獣が悪事を尽くすような表現を好む子どももいます。後から否定してはかわいそうなので、あらかじめ残酷や下品は禁止します。「ドラゴンはキャラクターですか」と聞かれて、「ドラゴンは昔からある想像の生き物だからいいけれど、ブルーアイズ（遊戯王）とかリザードン（ポケモン）はだめだよ。キャラクターの単純な合体も安易。自分で考えたドラゴンにしてね」と答えます。借り物のキャラクターには細かな設定があり、子ども自身の想像の余地が低いからです。参考になりますでしょうか。

造形遊びの導入のポイントを教えてください。

石賀直之

造形遊びの導入にはことさら神経を神経を遣いましょう。最初の５分が重要です。始まってから教師がいろいろ指示を出すのはよくありません。その指示に従う活動になるからです。あくまで材料と子ども自身の関わりの中で生まれたことを大切にします。

こういうと導入は間違えられないような気がして大変なようですが逆に言えば最初の５分だけ考えればよいのです。しかもこれからお話しする本筋さえ見失わなければ多少言い方が間違っても子どもたちは活動の中で忘れてしまうから大丈夫です。それでは低、中、高学年別にみていきましょう。

導入のポイント

●低学年では材料に対して体の感覚を働かせるような導入がよいです。考えたり視覚のみに頼るような言い方はさけるべきです。いよいよどう言ってよいか困ったら「材料となかよくなろう！」と叫んでください。これで十分です。

●中学年では子どもの意欲を引き起こすような言い方がよいでしょう。「みんなでなにができるかな！」「みんなでチャレンジしてみよう」などが考えられます。中学年にとって「みんなで」はキーワードでしょう。友達や材料との関わりの中からなにか生まれる期待感が増します。

●高学年では材料に関わりながら自分の思いがもてるように可能性を追求できるような言い方をするのが大切です。「見方を変えてどんなことができるか追求してみよう」と言えばたいてい大丈夫です。ここを大切にしないと環境に関わる活動に広がったときより深い追求心が生まれないものです。

サクラ マット水彩マルチ 12色

白2本入り

SAKURA MAT WATER COLORS MULTI

12 ml ポリチューブ入り

特　長

- マット水彩の優れた描画特性に、ペットボトルや牛乳パック等のいろいろなものに描ける機能を加えました。
  絵画だけでなく、工作用としても使え、用途が広がりました。
- 道具や衣服の汚れが落としやすくなり、後始末も簡単になりました。
- 水彩セットの絵の具として最適な、濡れても水に強いPPケース入りです。

サクラ　マット水彩マルチ　12色　白2本入り

1,260円（本体価格1,200円）

株式会社サクラクレパス

ホームページ http://www.craypas.com